

スキップ・ダニエルズ 史上最強のキャディ

— 前編 —



プリンシスをプレーするサラゼン（手前右）とキャディのスキップ・ダニエルズ（左端）

■今年154回目を迎える全英オープン（ジ・オープン）。今回は16日から北イングリッド、マージサイドのサウスポートにあるロイヤル・パークデールで開催されている。毎年、様々なドラマが繰り広げられるが、1860年に始まった同大会の長い歴史の中で、もっとも劇的な大会のひとつに挙げられるのが、ジーン・サラゼンが制した第67回全英オープンだろう。その勝利を可能にしたキャディ、スキップ・ダニエルズとの物語を、今号と来週号でお届けしたい。

ライバルからの提案



史上初めて4つのメジャータイトル全てを制し「キャリア・グランドスラム」を達成したプロゴルファーのジーン・サラゼン。1923年までに全米オープン1回、全米プロを2回制したものの全英オープンのタイトルは手の中に収められずにいた。1928年、サラゼンはロイヤル・セントジョージスで開催される第63回大会に出場するため、ベレンガリア号に乗船し、大西洋を航行していた。

サラゼンは敬愛するライバル、ウォルター・ヘーゲンと共に喫煙室で一杯やりながら食後の会話を楽しんでいた。「ヘーゲンさん。ヨーロッパ遠征は膨大な金がかかる。それでも全英オープンに勝つためなら何度でも挑むつもりです。何としても全英のタイトルが欲しい」

酔いも手伝ってか、サラゼンは饒舌に夢を語った。既に2度、全英を制していたヘーゲンはサラゼンの興奮をからかうように太い葉巻から立ち上る煙と戯れながら呟いた。

「君が全英に勝つことはないだろうよ」

ヘーゲンは驚くサラゼンの表情をいたずらっ子のように覗き込むと「ただし」と続けた。「俺が雇ったようなキャディを使えば、話は別だ」。

ヘーゲンはウェイターが運んできた2杯目のウイスキーをひと口含むとこう言った。

ウォルター・ヘーゲン

(Walter Hagen 1892 - 1969)



●プロゴルフ界の父と呼ばれ、スポーツ界のステータス向上に尽力した。スポーツ選手として初めて生涯獲得賞金が100万ドルを超えた。

●メジャー制覇はジャック・ニクラウスとの18回、タイガー・ウッズとの15回に

次ぐ11回。ただし、マスターズ選手権が始まった頃には全盛期を過ぎており、グランドスラムは達成していない。

●急成長したアメリカのプロに勝てなくなった英国の選手に「そろそろ窮屈なジャケットを脱いでプレーした方がいい」とアドバイスしたという逸話は有名。写真は1921年に全米プロを制した際のもの。

「では、こうしよう。俺はもう全英を2回勝っている。もう1回勝ったところで以前ほど感動することはない。君に俺のキャディを貸してやろう。ロイヤル・セントジョージズ、デイル(ロイヤル・シンクポーツ)、そしてプリンスの3コース以外では決して担がない男だ。歳はいつているが腕は確かだ」ヘーゲンは残りのウイスキーを一気に飲み干すとサラゼンの目をじっと見据えて言った。

「ただ、えらく選り好みの激しい男でな。特別なものを持っている人間のバッグしか担がない。例えばプリンス・オブ・ウエールズ(王太子)のちのエドワード8世)とか、この俺様と」

クラブに到着すると早速サラゼンはダニエルズに会った。ヘーゲンが事前に話をつけてくれていた。ダニエルズは英国のキャディの中でも高齢の方で61歳だった。一度もアイロンをかけたことがないという、セルロイド製カラーをつけたヨレヨレの黒いスーツに身を包み、くたびれた帽子を深々と被って立っていた。口ひげには白髪が混じり、帽子のつばの奥でギョロリとした黒い瞳がサラゼンを値踏みするように鋭く光っていた。

第一次世界大戦に参戦した古兵で、全英オープンが始まるまでの10日間、サラゼンは練習に打ち込み、イングランドのリンクスコースに馴染もうと努めた。ダニエルズは本能的に自分が仕える人間の力を最大限に引き出すコツを身に付けているかのようだった。

「今のシヨットは素晴らしい。ヘーゲンさんでもあれほどのボールを打っているところを見たことがありません」などと誉めそやしてはサラゼンをその気にさせた。練習場ではサラゼンがボールを打つと脚を引き摺って拾いに走り、再び走ってサラゼンの元へとボールを運んだ。また、クラブを運ぶだけでなく、シヨットが悪い時にはスイングの改善点を的確に指摘した。

大会が始まる頃には2人の間には確固たる信頼関係が醸成されていた。

「今のあなたならヘーゲンさんにも負けないでしょう。ヘーゲンさんにさえ勝てばきっと優勝できます」。

トーナメントが始まった。ダニエルズに絶対的な信頼を寄せるようになっていたサラゼンは、彼が差し出すクラブを素直に受け入れ、絶妙なシヨットを放ち続けた。第1ラウンドを72で収め、2日目も初日同様の危なげないプレーをしていた。しかし14番のパー5ホールでサラゼンは初めてダニエルズのクラブ選択に異論を唱えた。サラゼンは1打目を右に押し出し、ボールはラフに止まった。このホールはグリーン手前70ヤード辺りに深いクリーク(小川)が横切っており、俗にスエズ運河と



サラゼンやヘーゲンがイングランド遠征の際に利用した、ベレンガリア(Berengaria)号。

かだ。今回もサンドイッチの海岸で俺の到着を待っているはずだ。キャディフィーは滅法高い。少なくとも30から40ポンドは覚悟した方がいい」

「全英に勝てるなら大した額ではありません。で、そのキャディはなんて名前なんです？」

「ダニエルズ。脚を引きずって歩くんで、スキップ・ダニエルズと呼ばれている。本名は知らん」

その後、ヘーゲンはダニエルズの性格を詳しく話し、1922年にロイヤル・セントジョージズで開催された全英オープン優勝が、ダニエルズの的確な判断と指示に負うところが大きかったことなどを話した。サラゼンも特に外国ではキャディの良し悪しが勝敗の行方を大きく左右することを痛いほど知っていた。ロイヤル・セントジョージズのような屈指の難コースではなおさらだった。

運命の14番ホール



「ダン。ここでバーディーが取れば単独トップだ。明日の新聞の見出しに僕の名前が載るのを見たくはないかい？」

「ダニエルズは努めて冷静に答えた。『もちろん見たいですとも。でも、今日はいけません。マッシーで確実にフェアウェイに戻すべきです。我慢してください』

しかしバーディーのイメージが出来

呼ばれていた。サラゼンはボールの状態を確かめた末、スプーン(3番ウッド)でグリーンヒットすればスエズ運河を超すことができるかと判断した。しかしダニエルズは黙って首を横に振り、マッシー(5番アイアン)を入差し指でトントンと叩いた。しかしサラゼンは頑なだった。

「ダン。ここでバーディーが取れば単独トップだ。明日の新聞の見出しに僕の名前が載るのを見たくはないかい？」

「ダニエルズは努めて冷静に答えた。『もちろん見たいですとも。でも、今日はいけません。マッシーで確実にフェアウェイに戻すべきです。我慢してください』



▲イングランド屈指の難コースと言われるロイヤル・セントジョージズのクラブハウス。

▶1928年の全英オープン。サラゼンはこのロイヤル・セントジョージズの14番(グリーン手前に、通称「スエズ運河」と呼ばれる小川が流れている)でダニエルズが差し出した5番アイアンを拒否。みずから選んだ3番ウッドがもとで痛恨の7打をたたき、ヘーゲンに2打差で敗れ、悲願の優勝を逃した。





ジーン・サラゼンと妻のメアリー。

「サラゼンさん。もう一度やり直しましょう。私が死ぬ前に、どんなことがあってもあなたに全英オープン優勝をさせたいです」
2人は固い握手を交わし、再会を誓って別れた。

再びサンドイッチへ



上がったサラゼンが耳を貸すことはなかった。

「悪いが僕は僕のやり方でやらせてもらうよ」

そう言うとはッグからスプーンをスリと引き抜き、サラゼンは力任せにボールを引つ叩いた。ところがクラブヘッドが厚いラフに遮られてボールはわずか20ヤードほど飛んで再びラフに捕まった。頭に血が上ったサラゼンは3打目もまたスプーンで打ち、なんとかフェアウェイに出したもののその後も冷静さを欠き、結局このホールを2オーバーの7とした。ダニエルズの瞳には明らかな失望の色が浮かんでいた。

「大丈夫。すぐに取り戻しますよ」
ダニエルズは鼓舞したつもりだったがサラゼンの耳には「だからあんたはいつもヘーゲンに勝てないのだ」と言っているようにしか聞こえなかった。

結局、この年の全英オープンを制し、クラレットジャグ（優勝トロフィー）を手にしたのはダニエルズを譲ってくれたウォルター・ヘーゲンだった。サラゼンとは2打差だった。大会2日目、スエズ運河で感情的になり、ダニエルズの制止を無視して叩いた余計な2打が悔やまれた。

大会終了後、サラゼンはダニエルズにスエズ運河のことを率直に詫言った。ダニエルズはこぼれ落ちそうになる涙を必死で堪えていた。そして別際、絞り出すように言った。

「お金のことなら私も随分考えました。それでも全英オープンはいい投資になるはずですよ。さあジーン。船とホテルはもう予約してあります。あなたがすべきことはパスポートを取ることだけ。一週間後、あなたはプレーメン号に乗ってイングランドに向かうのよ」

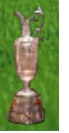
サラゼンは答えた。
「しかし行くとなれば往復の船賃や滞在費、そしてキャディフィーなど遠征費用だけでも軽く2千ドルはかかるんだ。優勝したって賞金はわずか100ポンドだ。こんな時期にそんな大金を注ぎ込むことに積極的になれないよ」
メアリーは少し悲しそうな表情を浮かべたかと思うと次の瞬間、母親が子どもを諭すような口調できっぱりと言った。

「あなたがどれだけ全英オープンに勝ちたくて、それに向けて誰よりも努力してきたことを私はよく知っているつもりです。あなたはイングランドに行くべきですよ」

4年が過ぎ、全英オープンが再びサンドイッチに帰ってきた。今回の会場はロイヤル・セントジョージズの隣にあるプリンススGCだった。しかしサラゼンはこの時、英国への遠征に消極的だった。1929年のミュアフィールド、31年のカーヌステイとあれから2度、全英オープンに挑んだがいずれも勝てなかった。

当時、プロゴルファーのステータスは今より遥かに低く、賞金も安かったため海外遠征はリスクの高い投資となった。例え優勝できたとしても遠征費用の方が遥かに高くついた。サラゼンは財政的にも行き詰まっていた。そんなサラゼンの背中を押したのは妻のメアリーだった。

心変わり



イングランドに到着し、サボイホテルに投宿したサラゼンは、そこで熱狂的なゴルフファンと言う男と知り合い、翌日、スラウにあるストーク・ボージスGC（現ストーク・パーク）に誘われた。ストーク・ボージスでは27歳の若いキャディがサラゼンのバッグを担いだ。サラゼンはこの日、大層調子が良く、67でラウンドを終えた。それを見たキャディが驚き、全英オープンではぜひ自分にキャディをやらせて欲しいと激しく売り込んだ。

しかしサラゼンは「悪いがダニエルズというキャディと4年前に約束をしている。僕のことを待っているはずだ」とやりわりと断った。

それでも若いキャディは諦めず、「ダニエルズさんのことは私も知っています。でも彼はもう65歳くらいですよ。悪く言うつもりはないが、彼はあなたのバッグを担ぐにはあまりにも歳を取り過ぎています。視力も低下したらしく

いし、最近では病気がちだとも聞いています。もしもダニエルズさんを雇ったらあなたはきっと優勝のチャンスを棒に振ることになりますよ」と食い下がった。

サラゼンは迷った。

確かに視力も低下し、病を患ったという65歳のダニエルズにサラゼンのバッグを担ぎ続けるのは難しいかもしれない。若いキャディとの相性にも好感触を持っていた。優しい妻が貯金をやり繰りして送り出してくれた全英オープン。なんとしても勝ちたかった。サラゼンはしばらく考えた末、青年に向かつて言った。

「分かった。会場で待っていないさ」
サラゼンは全英オープン本番直前、心変わりした。その代償は後にとつともなく大きなものとなってサラゼン自身に返って来る。

――後編に続く――

参考資料
ジーン・サラゼン著
「Thirty years of Championship Golf」

ジーン・サラゼン

(Gene Sarazen 1902 - 99)



● イタリアからアメリカに移住した家庭で育つ。本名はエウゲニオ・サラゼニ（Eugenio Saraceni）。実家が貧しかったため10歳からキャディの仕事を始めたことがゴルフとの出会いだった。19歳の時にプロに転向。全米オープン2度、全米プロ3度、全英オープン1度、そしてマスターズ1度、計7回、メジャータイトルを制し、メジャー4大会を全て制した初めてのキャリア・グランドスラムとなった。

● 1935年にマスターズに優勝した際は最終日の15番ホール、残り235ヤードを4番ウッドで打った2打目が直接カップインし、アルバトロス（当時はダブルイーグルと呼ばれた）を達成。トップに並び、プレーオフの末に劇的な逆転優勝を遂げた。バンカーショットが苦手な、克服するために飛行機のフラップの形状にヒントを得、9番アイアンに鉛を貼り付けてサンドウェッジを考案した。

● 日本とも縁が深く、1975年にはサラゼンが設計した「ジュンクラシック・カントリークラブ」が栃木県那須郡に設立され、1977年から「ジーン・サラゼン・ジュンクラシック」がスタート。主催者として毎年同コースを訪れた。